

創業寶曆元年
柏露酒造二百七十年



心技伝
辨

柏露誕生物語



創業宝暦元年
柏露酒造二百七十年



心技伝

柏露誕生物語

いあいさつ

柏露酒造の起源は、当時の山崎家が長岡にて亀屋または越中屋の屋号で造り酒屋を営業していた江戸中期宝暦年間にさかのぼります。そして時を経て明治には長岡藩主牧野家の酒造蔵を引き受け、昭和には空襲により店舗、工場ともに焼失という不幸に遭遇。そして戦後復興とともに柏露酒造として酒造りを再開しました。時代とともに酒造りに携わる者は変わっても、酒造りを通して長岡という風土に育まれた柏露酒造が受け継いできた精神性を象徴する「人に夢を与え、明日への活力をもたらす」美味しい酒造りへの姿勢は一貫して今日まで受け継がれています。様々な歴史的ドラマに出会いながら現在の柏露酒造は、濱田グループの清酒事業として「全従業員の物心両面の幸せを追求すると同時に、人類、社会の進歩発展に貢献する」べく、努力を重ねております。

今般は、創業二百七十周年記念といたしまして「心技伝翔る柏露誕生物語」を発刊致しました。この記念誌をご高覧賜り、当社に対するご理解を深めていただくとともに、これからも変わらぬご支援、ご愛顧を心からお願い申し上げます。

令和三年一月



濱田グループ代表

濱田雄一郎



柏露誕生物語

殿様が興した造り酒屋。
長岡藩主牧野氏と
清酒柏露の誕生にまつわる
由来と歴史のものがたり。



越後の酒の起源は、高志国（越の国）の姫神、奴奈川姫命が大己貴命（大國主命）をもてなすために、沼垂田の稲で造った甜酒であると伝えられています。絶世の美女と言われる奴奈川姫命に会うためにやって来た大己貴命に、越の国の米で造った甜酒を振る舞ったのです。

日本がまだ神の世だった頃、越後ではすでもち米を田に植えていました。そのもち米を発酵させた甘い酒が甜酒です。

甜酒は、その響きが天寿、天授に通じます。越の国の甜酒は、平和をもたらす天授の酒だったのです。

城下町で生まれた清酒

清酒「柏露」の発祥

清酒「柏露」の発祥は、旧長岡藩主牧野家の歴史のなかにあります。越後長岡藩の城下町で柏露は生まれました。

明治九年（一八七六）一月、旧藩主牧野忠訓の正室つね子により、旧長岡城の町口御門の榊形郭内に醸造場が作られます。当面の醸造高は八百石。蔵人は旧城下の元町人たち。その人たちが技術を提供して、醸造を開始しました。

その目的は、戦争で焼け野原になった城下を復興しようと努力している旧家臣たちに酒を飲ませてあげたいという、牧野家の思いでした。

当時の牧野家には、十一代忠恭、十二代忠訓、その妻つね子、十三代忠毅、それに何人かの子女がいましたが、忠訓は戦争責任を問われて東京に謹慎、忠毅は東京の慶応義塾に遊学中で、家には老人と女たちばかりが残っていました。

戊辰戦争で何もかも失った長岡にとって、酒の基となるお米は貴重なものでしたが、牧野家の人びとは食事を儉約し、酒米を集め、柏露を作り上げました。なぜ、そのような悲惨に遭ったかを説明します。

慶応四年（一八六八）一月三日、鳥羽・伏見（現在の京都府）で戊辰戦争が勃発。それが越後（現在の新潟県）に及んだのは、その年の五月

のことです。義を重んじた長岡藩の武士たちは、奥羽越列藩同盟軍に加盟し新政府軍と戦うことを決断、長岡城攻防戦が始まります。三か月に及ぶ戦いのなかで長岡城は二度落城、藩兵三百四十名以上と領民百名以上の命が失われました。

城はもちろん、城下町の大部分が焼失し、敗戦に終わります。その年の十二月、長岡藩は二万四千石に減封されたうえで復活しますが、町に住む人びとの生活は苦しいものでした。

そんななかで、柏露は生まれます。

つね子は、城下の人びとが希望を失いかけている時に、かつて正月元旦に城内で、主君が家臣に酒を一献^{いっこん}ずつ与えていた習わしを思い出します。

元旦に総登城した家臣は、初代藩主牧野忠成が十一歳のとき書いたといわれる「忠孝」の書に拝礼したのち小姓から酒一献ずつを賜わったといえます。

酒は人に夢を与え、明日への活力をもたらすもので長岡藩二百五十年

を支えたものでした。

つね子は旧町人の大黒屋本宮盤根^{いっわね}に相談し、その杜氏を借りて醸造店「柏葉屋」を立ち上げます。そして、できあがった八百石の清酒が旧家臣や領民たちに振るまわれたのです。

この時から、柏露の歴史が始まるのです。

殿様酒屋

旧長岡城下の人びとは柏葉屋のことを「殿様酒屋」と呼び、牧野家が商人になったと思った人もいたそうです。

親しみを込めて愛称で呼ばれた背景には、牧野家の善政がありました。牧野家の代々の領主は領民を大切にし、有能な家臣を家格にとらわれず登用する気風を持っていたため、領民からも家臣からも信頼され、慕われていました。

江戸時代の長岡藩は、城下町長岡を中心に、栃尾、新潟市の西蒲区な



「甲子大黒図」 牧野忠恭 画



雨龍

ど七万四千余石の領知を持っていました。牧野氏は、元和四年（一六一八）の入封以来、幕末まで十二代を数え、譜代大名の中堅として活躍。九代、十代、十一代の藩主は幕府の老中職となっています。

特に九代牧野備前守忠精は、名君の誉れが高く、領民からは「雨龍の殿様」と慕われていました。

雨龍とは中国の人が想像した吉兆をもたらすと言われる伝説の小龍のこと。これを気に入った忠精は、雨龍の図を描いて家臣や領民に配っています。その忠精は酒が好きだったようです。領民も主君に似て、酒を飲む機会が多かったようで、それを物語る絵が伝わっています。

ところで、創業時の柏葉屋の店主は牧野つね子。夫の忠訓が戊辰戦争敗戦の責任をとって東京で謹慎中だったため、実父の忠恭と共に経営の指揮を執りました。近代日本でもっともはやい女性社長であったといわれるかもしれません。

その頃の商標は、牧野家十一代当主忠恭が描いた「甲子大黒図」です。「御隠居様」「御老公」と呼ばれた忠恭が自ら絵筆をとって描いたもので



峠 夏美 画

す。「甲子」は物事の始まりを表し、大黒は繁栄をもたらすと言われています。

そもそも牧野氏とは

柏露を興した旧長岡藩主牧野家は、第八代天皇孝元天皇の曾孫にあた^{たけのうちのすけね}り、不死身といわれた武内宿弥を祖先に持っています。宿弥は第十二代景行^{けいこう}、第十三代成務^{せいむ}、第十四代仲哀^{ちゅうあい}とその妃の神功皇后、第十五代応神^{おうじん}、第十六代仁徳^{にんとく}と五代の天皇に仕え、その年齢は二百八十歳とも三百六十歳とも伝えられています。

宿弥の子孫は後に田口氏または田内氏を名乗り、大和国田口村（現在の奈良県）に住み、激動の平安期を過ごします。その後、阿波国^{あわ}（現在の徳島県）へ移住し、源平合戦の際には平氏に属し、阿波民部成能^{みんぶしげよし}を名乗り、屋島の合戦などで平家の大將として活躍しています。平氏が壇ノ浦で敗れた後、熊野^{くまの}に逃れ、室町時代の前期に三河国牧野村（現在の愛

知県豊川市牛久保町）に渡り、牧野氏と名乗ります。

三河時代の牧野氏は牧野成時^{しげとき}（後に出家し古伯入道^{こはく}）という英傑を輩出して、東三河地方の旗頭となっています。その拠点となったところが牛久保城です。古くは牛久窪とも書き、戦国時代には東海道における戦略上の要所でした。牧野氏は家臣たちをよくまとめ、牧野党を結成し、「常在戦場」の気風を作り上げました。恥を知り、卑しい振る舞いはせず、正々堂々と戦う事を旨^{むね}としていましたが、そのために全滅の危機にも遭っています。

しかし、領民の協力などにより危機を脱し、牧野家は生き延びます。

戦国時代、敵に追われた牧野の殿様は、領民の家の納屋（藁にお）という説もある）に匿われます。機転を利かせた領民は、納屋の戸に梯子を立てかけ、何事も無かったかのように振る舞ったため、追っ手はこれに騙され、殿様は難を逃れることができました。領民は殿様を追っ手に突き出せば褒美をもらえたにもかかわらず、そうはしませんでした。日頃から自分たちを大切にしてくれる殿様を守りたかったのです。



うなこうじ祭り ヤンヨウ神
 (「三河に興りし牧野」より)
 豊川市桜ヶ丘ミュージアム所蔵)



五間梯子

長岡藩の軍旗の図柄、「五間梯子」は、その時の故事に基づくものです。それ以来、牧野家は「領民あつての牧野家」という方針を貫き、それまで以上に領民を大切にしました。城下の祭りの際には城内に領民たちを招き入れ、酒を振るまつたそうです。

領民たちは、牛久保城からの帰路、道に寝転んで牧野氏を讃える木遣りを歌っています。

その時の様子は、牛久保八幡宮の若葉祭(別名うなこうじ祭)として、現在に受け継がれています。農民たちが酒に酔って道に寝ころび、誰かが起こしてくれるまでそのままにいるという奇祭です。木遣り歌のなかに「牧野様の白袴、白袴」という歌詞があり、正確な意味は不明ですが、牧野家の善政を讃える歌として伝えられています。

牧野家とその一党が牛久保城から上州大胡(群馬県大胡町)に移ったのが天正十八年(一五九〇)。越後長岡城主となったのが元和四年(二六一八)。牛久保では牧野家が去って四百数十年を経た現在でも、牧野家を讃える祭りが続いています。

永禄八年(一五六五)、牧野成定は徳川家康の旗のもとに入ります。成定の子は家康から「康」の字を授かり康成と名乗り、その子で初代長岡藩主となった忠成の名は、二代將軍徳川秀忠から「忠」の字を授かったものです。以後、牧野家の家系では、当主の名に必ず「忠」を冠し、その伝統は現在の当主、十七代牧野忠昌氏まで続いています。

一 献の酒

酒は土魂を洗う清水

長岡城下の年中行事に、「元旦登城」があります。藩士ら約六百名が、江戸勤番などを除いて、元旦の朝に一斉に登城し、藩主に挨拶をしました。

長岡の正月元旦と言え、厳冬の最中、積雪も多い季節です。降り積もる雪のなか、雪駄履きで袴姿の武士達は、雪で転びそうになりなが



「正月 年始登城の図」(小川當知「長岡城之面影」より)

ら、手助けのための従者を従えて登城しました。城は十七の城門と九つの隅櫓^{すみぐら}を備えたもので、七万四千余石の大名の城としては広いものでした。前日に長柄者^{ながえもの}(足軽)が雪道をあけて、その間を縫うように、武士団が黙々と本丸御殿に向います。太鼓櫓からの太鼓の音を聞き、三階櫓を見上げながらの登城です。

まず、玄関に入ると初代藩主牧野駿河守忠成が十一歳の時に書いたという「忠孝」の御書に拝礼をします。そして、順次、藩主の前に出て、新年の挨拶をして退出します。藩主が江戸詰の場合は、世子や家老が挨拶を受けます。

退出の際には「お流れ」と称する一献の酒が小姓から各藩士に振る舞われます。藩是「牛久保の壁書」のなかに「土魂は清水で洗え」とあるように、長岡武士たるものは年頭にあたり、心を新たにし、忠義を尽くそうという誓いの酒でした。

忠孝を御拝する意味は、儒教にある「正しく継ごう」ということ。長岡藩士全員が心をひとつにして、忠義を守り、それぞれがその役割を全



「徳川十七将の図」狩野秀信 画
上から3段目の左から2番目が牧野康成（長岡市立中央図書館所蔵）

うして藩政を担おうというものです。一献の酒で、主従で心意気を誓い合ったのです。まさに、酒は士魂を洗う清水であり、自らの心意気を支える尊いものだったのです。

常在戦場の精神の酒

常に戦場にあり

長岡藩の藩是「牛久保の壁書」。その第一条が「常在戦場の四字」です。牧野氏は、三河牛久保城主の時代から「常在戦場」精神を第一義とし、質樸剛健の気風を守ってきました。「常に戦場に在り」とは、日頃の生活のなかにあつても、常に戦場にいる覚悟を持つということ。危機に備え、気を緩めないようにという教えです。また、「どんな苦難に遭遇しても、戦場では創意工夫をして生き抜こう」とする心掛けをさとするものであったと言えるでしょう。清酒「柏露」はそういった精神を受け継い

だお酒です。

武士の務めは、領土の平和と領民の生活を守ること。そのため藩士たちは、倫理知識や武術を学ぶのはもちろん、社会に貢献的な心を養うことも求められたのです。その一方で、領民は大切にされました。作業を終えた農民たちは、三々五々集まっては酒宴を楽しんでいます。牧野氏は「民あつての領主である」との思いから、農民の楽しみを奪うようなことは決してしなかったのです。

常在戦場の四文字

弓矢の御法という事

礼儀廉恥という事

武家の礼儀作法

貧は士の常という事

士の風俗は御外聞にかかるという事

百姓に似るとも町人に似るなという事

進退ならぬという事

鼻は欠くとも義理は欠くなという事

腰はたたずとも一分を立てよという事

武士の義理 士の一分を立てよという事

士の魂は清水で洗えという事

士の魂は陰ひなたなき者という事

士の切目 折目という事

何事にも根本という事

日陰奉公という事

荷ない奉公という事

親類は親しみ 朋友は交わり 傍輩中は附き合うという事

また一町の交わり、他町の附き合いという事

長岡藩の藩是「牛久保の壁書」

高潔な精神を藩是とした長岡藩では、藩士同士で「常在戦場の覚悟を知れ」「武士の恥辱を忘れたか」「武士の義理とは」などと互いに語り合うと、すべての問題が解決したと伝えられています。

酒は人の力

江戸時代、酒の基となる米は貴重なものでした。米を潰して酒にすることは、領主にとっても忍びがたいことだったでしょう。

しかし、歴代の長岡藩主は、伝統的に酒屋を保護してきました。それは、長岡築城の際の領主堀直奇が執った政策に始まります。

直奇は長岡築城の際、領民を苦しめたくないとの思いから「人柱」は立てず、その代わりに木で作った人形を埋めたと言われる人物です。

工事には多くの領民が駆り出されていますが、過労をさせないよう労働時間を守り、仕事帰りには賃金のほかに身欠きニシンと酒が振る舞われています。それは、男女にほぼ平等に分け与えられました。木椀一杯の酒が、工事に携わる領民たちに潤いを与え、良政を期待させたのです。

直奇は領内の繁栄策の一環として、元和二年（一六一六）に九種の諸役（税）を一時的に免除しています。そのなかで「むろ役」という酒税を免除しています。いつの時代にも、酒は人の宝であり、産業を興す活

力の源であることを物語るものです。

直奇の後を引き継いだ牧野氏も、酒の醸造を手厚く保護しています。牧野氏が執った政策は、「限られた酒造株を手に入れば、誰にでも酒造りを許可する」というものです。成功すれば大きな利益が得られるため、多くの者が酒屋を興しますが、その一方で、酒造りには高い技術が必要だったので、酒屋の盛衰は激しかったといわれています。

柏紋

牧野家紋「三ツ柏」の由来

牧野氏が三河国（愛知県）の土豪だった時代、その家紋は現在の「三ツ柏」とは違う「菊と桐」の紋でした。家紋は一族のシンボルとして、先祖から伝わるものです。一族は家紋により結束を図り、武将は戦場で家紋や旗印を掲げ、味方と敵を識別しました。



牧野家の家紋「三ツ柏」

戦国時代の三河は各地に土豪が割拠し、覇権を争っていましたが、その末期には、東三河ほぼ一帯は牧野氏、西三河は松平氏によって治められています。

後に徳川氏となる松平氏は、三つ葉葵の家紋を使っています。

戦国時代の牧野氏は、駿河国（現在の静岡県）の今川氏に属する土豪の武将でした。一族の長であった牧野成時（古伯入道ともいう）の時代の牧野氏は最も強豪で、吉田城（現在の愛知県豊橋市）を築き、城主になっています。

ある時、成時が牛久保の八幡社の若宮に参詣した際に吉兆がありました。今川氏からの「東三河の馬見塚に新城を築いてもよい」という知らせでした。

成時はとても喜び、「ひとえに神の恵み」だとして、社前の柏葉で神酒を捧げたことから、家紋を三つ柏に改めます。「柏露」の名も、このことに由来します。

時代は過ぎ、今川氏が衰退し織田氏・松平氏が台頭。永禄八年

（二五六五）、牧野成定は松平元康（後の徳川家康）の軍門に下ることになります。

ところで、成時が家紋とした柏の葉は、冬に枯れた後も、春に新芽を出すまで、枯葉のまましっかりと枝に付いて冬を過ごすことから「次代に思いを継ぐ」ものとされていました。新たな主君となった徳川家に重用され、越後長岡藩主として再び花開いた牧野家の姿と重なります。

「柏露」の創業は越中屋

柏露酒造の前身の越中屋は、「亀屋」と名乗っていました。亀屋は「庄兵衛」の名で、頭人（祭事、神事などを執り行う際に中心的な役割をする者）として、元禄五年（二六一八）から『皇神御用記』に登場します。「亀屋庄兵衛」としては享保十三年（一七二八）、元文五年（一七四〇）、に記載があり、江戸時代中期、宝暦年間（一七五一～一七六三）には酒造家であったことが『諸珍舗永代帳』に記されています。



河井継之助

宝暦十年（一七六〇）には、裏二之町「亀屋庄治右衛門」の名で記載が見られ、長岡城下の有力商人であったことがうかがえます。「蔵王権現社」の「皇神御用記」には、文化十三年（一八一六）十月八日の日付で「上条（殿）・裏一ノ町 越中屋又七」と屋号で記されています。

大正三年（一九一四）に編集された『奮闘之長岡』には、越中屋山崎又七氏（山崎又左衛門の長男）談で「私方で酒造業を営んでおるのは、私で五代で亀屋或は越中屋と称し、元裏一之町に在った」と記されています。後に亀屋の名は出てこず、代々越中屋と名乗っていたようです。当時、酒造りは厳しい制限があったため、「隠し造り」（密造）が当たり前のように行なわれていました。

天保二年（一八三一）、越中屋は隠し造りで摘発され、町代（町内会長）役を取り上げられたうえ、叱り、戸メ（家の門を釘付けにして外出を禁止、謹慎させること）の罰が加えられます。越中屋以外にも、町老の大黒屋本宮伊兵衛、検断格町老三国屋三上久五郎、舩屋、壺屋、大崎屋、能登屋、平野屋、兵庫屋、富田屋、大坂屋、柁屋、堺屋、山城屋、滝村屋、栃尾

屋が軒並に摘発され、越中屋と同等の処分を受けていることから、隠し造りが当たり前だったことがわかります。

それは、長岡城下の人びとが酒を欲し、経済活動も豊かだった証拠といえるかもしれません。

戊辰戦争と長岡藩

慶応四年（一八六八）一月に鳥羽・伏見で始まった戊辰戦争が越後に及んだのは、その年の五月のことです。

幕末の日本は、全国の諸侯が多額の借財に苦しんでいました。そのうえ、アメリカ、イギリス、ロシアなどの列強国は日本侵略の機会を窺い、そのなかで倒幕運動が起こります。

越後長岡藩は郡奉行に河井継之助を抜擢。町奉行兼帯、奉行格加判と出世をさせて、次々と斬新な改革を実施します。藩士の禄高を改正するとともに知行を平均化、教育改革として「造士寮」を設立し、士道の徹

底強化を図ります。また、近代的兵制を採用、備えを充実させる一方で、産業興隆の妨げとなっていた河税（かわぜい交通税）などを廃止します。それらが功を奏し、長岡は富裕な藩になっていきます。

騒乱の日本にあって、独立した理想郷を求め、地方経済を豊かにしていた長岡藩でしたが、やがて、時代の荒波に襲われます。

慶応三年（一八六七）十二月に明治新政権が樹立、翌年一月三日には旧幕府軍と京都郊外の鳥羽・伏見で戦闘を開始します。この戦いで勝利を収めた新政権側は、全国諸侯に隷属を求め、同時に旧幕府軍側に追討令を発したため、これに反発した全国の諸藩との間に戦闘が勃発。戊辰戦争が始まります。

長岡藩にも新政権の征東軍が近づき、軍事総督となった河井継之助は、征東軍東山道先鋒総督府軍監の岩村精一郎と、小千谷の慈眼寺において談判を行います。

継之助は、旧幕府側と新政権側の調停を申し出て、奥羽への侵攻停止を訴えますが、一方の岩村は「敵か味方が明らかにせよ。さもなくば征

伐する」という新政権側の要求を突きつけるばかりで、継之助の話などまったく聞こうとはしませんでした。談判は決裂し、長岡藩は征東軍と戦うことを決断。慶応四年（一八六八）五月、北越戊辰戦争が始まります。三か月に亘る長岡城をめぐる攻防の間、落城した長岡城を一度は奪還するなど善戦するものの、二万名を超える圧倒的な征東軍の戦力を前に多数の犠牲者を出し敗戦。長岡城下は焼け野原となります。

戦闘中に銃弾を受け重傷を負った継之助は、会津に向かう途中の塩沢村（現在の福島県只見町）で死亡、大隊長の山本帯刀も新政権側によって斬首されます。戦死者は三百四十名以上、長岡藩藩士の四人に一人が犠牲となる凄惨な戦いでした。

その後、減封されたうえで再興を認められた長岡藩は、二万四千石の小藩として再出発しますが、城下の飢餓と進まない復興が、生き残った藩士とその家族、城下の人びとを苦しめました。



三島億二郎(長岡市立中央図書館所蔵)

勸業に酒造り

再興した長岡藩は、藩士族の帰農帰商（武士が庶民になって働くこと）を勧めていました。戊辰戦争後の復興を指導していた大参事の三島億二郎の日記によれば、「藩人一般生殖を立て」と、明治三年（一八七〇）十一月には、士族に帰農帰商を勧めていたことが記されています。しかし、帰農や帰商して士族から平民になることに反対の者も多く、士族が仕事に就くことには抵抗が大きかったようです。

それでも、三島らは産物会所（特産物の生産を奨め、広く販売するための機関）を設置して自立の道を探り、女性たちの機織はたおりを長岡の産業にしようと考えます。そのために、士族の屋敷地に桑を植え、また、大規模な桑畑を造成するため、焼け残っていた城郭を取り崩して堀を埋め、田畑を開墾するとともに城跡にも桑の木を植えていきます。

広い堀は田圃となり、稲も植えられています。次第に城跡は取り崩されて、学校や茶屋、集会場などが建っていきます。「雪月花亭」と名付

けられた茶屋は城の面影を思い起すもので、集会場の「撃石館げきせきかん」の名は、戊辰戦争で弾丸を撃ち尽くした兵士が、石を投げて戦ったことを追懐したものです。

士族たちも、次第に明日の長岡のことを考えて藩の籍を脱し、帰農帰商する者が多くなりました。そんな士族や就業者を励まそうと、牧野家が興した酒屋が柏葉屋でした。

柏葉屋の経営も、初めからうまくいったわけではなく、様々な困難がありました。まず、牧野家は酒造りの技術を持っていませんでした。そこに手を差しのべた商人がいます。城下の裏二之町（本町二丁目）で酒造りをしていた大黒屋の木宮伊兵衛（号を盤根という）です。

大黒屋は城下一番の酒屋でした。多い時には二百五十石の酒を造り、代々の杜氏も抱えていました。大黒屋は藩主の心意気に賛同し、全面的に協力します。

清酒「柏露」は明治九年に生まれていますが、言わば士民協働でできた酒です。伊兵衛は、長岡の発展のために、酒造技術と酒蔵の提供を申

し出たのです。

大黒屋が支援した背景には、当時の商人たちが町の復興に苦心していた経緯があります。裏一之町の町代だった星野伊三郎は、三島億二郎・岸宇吉らが主宰する「ランプ会」に入っていました。そこで、士民が協力して町を復興することを話し合っています。復興には、士族たちの協力を得て、その知識や人脈と商人たちの事業を結びつけることが必要です。そのため、伊三郎は伊兵衛の大黒屋に協力してもらったのです。

伊三郎は、柳原町の商人の今井龍蔵とともに営業監督として柏葉屋に入り、業務は士族の若林繁が担当しています。もちろん、営業者の名義は牧野つね子です。

このような士民協働。しかも旧藩主家が商業に就き、商人がそれを助けたことは、当時の日本では珍しい出来事でした。

柏露は「殿様酒屋でできた酒」として珍重され、会合などで使われることも多く、当時の民衆にとって身近な大衆酒となりました。

しかし、やはり士族の商法には無理がありました。次第に貸付金（売

掛金）が多くなり、明治十四年・五年には資金繰りに行き詰まります。

旧長岡藩士族の多くが、明治十年に鹿児島で勃発した西南戦争に出征。凱旋した士族たちは、毎夜のように祝勝会をしています。

西南戦争の後、日本政府の負債はピークに達します。そこで、大蔵卿の松方正義が「松方デフレ政策」を開始。すると、たちまち柏葉屋の経営は行き詰まってしまいます。牧野家が凱旋した士族に、大量の酒を配ったことも仇になったようです。

その時の柏葉屋の窮状を救ったのも長岡商人でした。裏一之町で酒造りをしていた越中屋の山崎又七が、柏屋（柏葉屋）から改称（かいせう）を買い取り、柏露の商標をそのまま受け継ぎます。

後年、又七は譲渡について、「牧野家の方から酒造場全部（地所千坪あり）を五千円で売渡したい交渉があったので、旧来の懸代金を私が無手数料にて、取集めて上げる約束にて、お引受した。私がお引受する時は売渡主がやはり、清廉院（せうれんいん）（牧野つね子）様で、三島億二郎・加藤一作の両氏が委任代理であった」と延べています。三島も加藤も士族出身者

でした。

招魂社祭

「招魂社祭」が明治二年（一八六九）の三月二十四日から二十六日にかけて、旧城下近くの千手町の真照寺（真宗大谷派）で行われました。

当時、真照寺には明治新政府の長岡民政局が置かれていました。そこで、焼けた栄涼寺（浄土宗）、法蔵寺（浄土宗）、伽則院が導師となつて法要を行いました。

祭壇には戦死者名簿が飾られ、旧長岡藩主家の第十一代牧野忠恭と第十代藩主牧野忠雅の妻の鏡心院が列席しています。参列した主な家臣は、家老の山本頼母（旧名牧野頼母）、小倉左近（植田重兵衛）、芦野寿（村松忠治右衛門）、原一平（萩原要人）。寺社方として、小金井儀兵衛、萩野喜右衛門、池田彦四郎、根岸勝之助、高井佐藤太らでした。二十四日、二十五日は士分、二十六日は足輕の遺族が焼香に訪れています。

「招魂社祭」にかかった費用は三百両。戦乱も約半年前に治まったばかり、しかも、焼土の長岡城下でその費用を捻出し、法要を行うには大変な苦勞があつたでしょう。

そこで、二十四日は本妙寺（法華宗）、長興寺（曹洞宗）、昌福寺（曹洞宗）、興国寺（曹洞宗）、徳聖寺（真言宗）、二十五日は西願寺（浄土真宗高田派）、西福寺（浄土真宗本願寺派）、徳宗寺（真宗大谷派）、光福寺（浄土真宗本願寺派）、西方寺（真宗大谷派）、専行寺（真宗大谷派）の協力を仰いでいます。

協力寺院には、お布施として銭五十疋と饅頭十五個を納めています。導師を勤めた寺院や牧野家の人びと、主な家臣には質素なお斉とぎが出されていますが、一汁一菜と饅頭が十五個、「酒はなし」とあります。

お斉に御酒を出せなかったのは、城下が荒廃していて酒造りができなかったからです。

そのことに落胆した牧野家の当主は、酒の復興が戦没者や遺族を慰めると考え、「殿様酒屋」の開店をめざすことになったのです。

山本五十六も招魂社祭に

明治十一年（一八七八）、西南戦争からの旧藩士の凱旋を機に再び始まった招魂社祭でしたが、当初は義士会（士族会）と名乗っています。時には侍行列をし、長岡落城の五月十九日前後に行うことが恒例になりました。招魂社祭には三島億二郎も参列し、銚子一本の柏露と煮しめを飲食しています。

大正十四年（一九二五）五月には、当時霞ヶ浦航空隊の副長兼教頭であった山本五十六海軍大佐を招待して挙行されます。五十六は旧姓を高野と称し、長岡藩士の家系の子孫でした。祖父の高野秀右衛門は、長岡落城の慶応四年五月十九日に戦死しています。

義士会の名の通り、長い間士族中心に行われていた招魂社祭ですが、五十六の提案により、画期的なことが起こります。悠久山の蒼柴神社脇の招魂社の墓前で、筵を敷いて招魂社祭が行われた際、「旧城下も戦禍で焼き払われたのだから同様に被害者だ」と主張し、旧城下の町人出身

者を招待したのです。

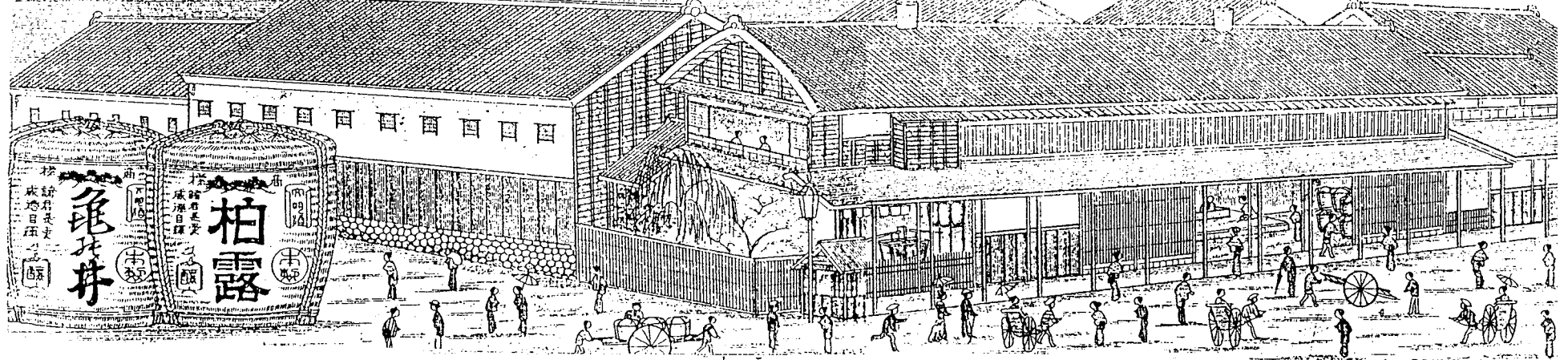
招待された旧町人のなかには郷土史家の反町栄一らがいました。旧藩士族に交って列席し、ともに墓前に敷かれた筵に座り、煮しめを食べ、酒を酌み交わしています。

栄一は、その感激から生涯五十六を尊敬し、後に連合艦隊司令官となり、昭和十八年（一九四三）四月十八日にブーゲンビル島で戦死した五十六の伝記を著しています。それは『人間・山本五十六』と題され、五十六の人間性をよく著した名著といわれています。

招魂社祭は、柏友会（旧長岡藩士族会）によって現在も続けられ、その会場では、いつも二合瓶一本の柏露が供されています。

長岡は酒造りの町

長岡では酒造りが盛んでしたが、それは、町の人びとがとても酒好きだったからといわれています。郷土史家の今泉省三による『長岡の歴史』



明治22年頃の越中屋（新潟県立歴史博物館所蔵「北越商工便覧」より）

第三巻には「長岡における酒造高をみるに元禄十二年（一六九九）に千六百五十石、天明五年（一七八五）に二千五百九十五石と大幅に伸びたが、同六年には千八百七十四石、翌七年に千二百六十八石へ『長岡市史』と漸減した。文政元年（一八一八）の長岡の人口が約一万五千名であるから、天明五年の造酒高からすれば、一人あたり一斗七升三合を消費した計算になる」とあります。人口には子ども、女性、老人も含まれます。また、「旅酒」（長岡に近い蔵王権現領の撰田屋村など、長岡領以外で造られた酒）も飲まれていたと考えられ、実際には相当量の酒が消費されていたことがわかります。

酒の価格はそれほど高くはなく、一升の小売価格は、享保六年（二七二）には生酒八十文、諸白六十文、次酒五十文、並酒四十文ほど。ソバ一杯が十六文の時代、現在の価格で四百円と考えると、八十文は二千円ほどです。庶民たちも、気軽に酒を楽しんでいたのです。

『奮闘之長岡』によると、酒造家五十三軒の造酒高について、大黒屋（木宮氏）が二百四十石と最も多く、次が越中屋で百二十八石、その他

は五十石ほど。明治四年（一八七二）十二月、二百五十石を醸造した越中屋は一躍トップになります。

人材育成

明治初期、日本国内の醸造家は、その数を一時的に増やしています。藩政時代の規制も無くなり、成功すれば利潤が多かったからです。明治十二・三年頃、新潟県内には千二百店ほどがありましたが、次第に淘汰されていきました。さらに、明治政府による酒税が小規模な酒造業者を廃業へと追い込んでいきます。そのなかにあつて、越中屋は科学的醸造法を確立して、品質の向上に努めています。

越中屋は、技術者の育成に力を注ぎました。杜氏の関五郎松を東京の高等工業学校（現在の東京工業大学）に就学させるなど、若い学徒には学資金を拠出しています。大切なのは人を作り、育てること。その考え



山崎又七 5代目
嘉永4年～大正元年（1852～1912）
（新潟県酒造組合発行「新潟県酒造史」より）

が新しい技術を生み、品質を向上させ、厳しい時代のなかにあった柏露を生き残らせたのです。

長岡の地下には信濃川の伏流水がありましたが、鉄分が多く、飲料にも適さない地下水が大部分を占めていました。

明治二十七年（一八九四）の長岡大火を機に、越中屋は城下北東の信濃川沿いの蔵王に一万二千坪の工場を移転。「蔵王蔵」と呼ばれるようになります。蔵王付近は昔から清らかな水に恵まれていました。お茶の水にも使われ、「正月の若水は蔵王の水に限る」と言われたほどです。

昔ながらの伝統的な製法を継承し、越後らしい酒造りにこだわながらも、科学的醸造の研究を重ね、それが功を奏して、明治三十一年（二八九八）には三千石を越える醸造量となっています。

山崎又七が人材育成に力を注いだのは、長岡に伝わる「米百俵」の精神に通じます。

戊辰戦争後の明治三年（一八七〇）、戦禍で荒廃し飢餓に襲われていた長岡に、三根山藩から百俵の救援米が贈られます。飢えに苦しむ城下

の人びとは、米の配分を期待していました。

ところが、大参事の小林虎三郎は、「ほんのわずかあまりの米を食べてしまえば、何も残らないが、子どもたちの教育に使えば、町の発展につながる」と主張。贈られた百俵の米を金に換え、将来ある子どもたちの教育資金にすることを決断します。

その時に作られた国漢学校は、現在の市立阪之上小学校、県立長岡高等学校へとつながり、数多くの有為な人材を輩出しています。

又七も、商工業の発展には人材育成が大切だと考えていました。その又七から、高等工業学校で醸造技術を学ぶ機会を与えられた関五郎松は、酵母の純粹培養の研究に励み、それは、柏露の酒造りに活かされました。

明治二十九年（一八九六）、五郎松は長岡の横枕にある岸家に入籍、岸五郎と改名。灘の「菊正宗」の工場を見学するなど研究を重ね、翌年には独立、岸五郎酒造場を始めます。

また、お抱え桶屋として蔵王蔵の山崎醸造場に入った渡辺定治は、後に、衛生的で品質管理のしやすいホーロータンクの製造を開始。全国の



高橋偵蔵博士
(新潟県酒造組合発行「新潟県酒造史」より)



山崎市治郎 6代目(又七の長男)
明治7年~昭和17年(1874~1942)
(新潟県酒造組合発行「新潟県酒造史」より)

多くの醸造業者に普及する先駆けとなりました。

商工業の発展

柏露は社会に貢献

又七は、進取の気性に富んだ長岡商人でした。長岡の醸造界をリードするとともに、商工業の発展に尽力しています。明治二十年(一八八七)に東京府(東京都)を含めた一府十九県の酒造業者が長岡で集会をしています。その取りまとめ役として奔走しています。また、新潟県下の経済界の発展策を話し合う「誠之社^{せいししゃ}」のメンバーでもあり、明治十年の国立第六十九銀行(現在の北越銀行)設立の発起人の一人になっています。明治十二年(一八七九)設立の長岡商会では有力株主。明治二十年(二八八七)創業の株式会社長岡興業の取締役にもなっています。

一方、当時勢いのあった政治活動には興味を示しませんでした。誠実

な酒造りと品質向上のための研究に注力、家業を発展させることに尽力します。明治三十一年(一八九八)、北越鉄道が開業し長岡駅ができると、柏露は、全国の主要都市とつながる長岡を代表する酒になります。

その需要の高まりに應えるため、工場を山崎酒造場として規模を拡大。慶応義塾を卒業して越中屋に戻った又七の長男市治郎が、柏露の営業に専念。東京大学農学部出身の高橋偵蔵博士とともに力を尽くします。

科学的醸造法

明治四十一年(一九〇八)頃には、造る酒の大部分を清酒にし、そのうち二千石ほどは全国に先駆けて「四段仕込法」を使い、好成績をあげます。また、みりん「明星」の製造を開始。それまでのみりんには無い品質の良さ、生産効率の改良による低価格で、日本の食文化を変えました。



山崎一三 7代目（市治郎の長男）
明治38年～昭和43年（1905～1968）
（近藤 久 著者、編集「柏露酒造夜話」より）

明治三十年代の後半になると、「蔵王蔵」は「柏露蔵」と呼ばれるようになります。

杜氏の多くは長岡近郊の農村出身者。その技術は高く、当時から高級酒を造っています。銘柄は「柏露」をはじめ、「柏正宗」「亀の井」「富士川」など、長岡を代表する清酒を輩出しています。杜氏の曽根吉五郎は、蔵王に酒小売店を開き「柏屋酒店」と名付けています。

柏陽会

昭和の初めには、杜氏たちの集まりである「柏陽会」を結成。これは、柏露蔵の杜氏たちが、新潟県の清酒の品質を高めようと始めたものでしたが、後には柏露蔵以外にも県下の多くの杜氏が参加する研究団体の結成につながっています。

又七の孫、一三が顧問役を務めた柏陽会の活動は、清酒「柏露」の名

を高めただけでなく、新潟県下の清酒業界に大きな発展をもたらしました。

このような貢献は、優秀な杜氏たちによって成し遂げられたものでした。その多くは長岡近郊の農家の二男、三男の者たちでした。性格は温厚で努力家、家庭に愛情を注ぎ、社会に貢献する者が多かったようです。

人びとに愛される酒「柏露」

その後も順調に営業を続けた柏露ですが、昭和十八年（一九四三）、第二次世界大戦による統制令により廃業を余技なくされ、蔵王工場を売却（当時の北越製紙）、昭和二十年八月一日（一九四五）には店舗と表町貯蔵蔵を戦災で焼失します。戦後、酒類統制解禁復活が始まり、昭和三十一年（一九五六）には「柏露酒造有限公司」として復活、長岡駅東口に新工場を設立し酒造業を再開します。昭和四十九年（一九七四）には現在の長岡市十日町に新工場を建設し移転、さらに高品質の酒を増産

する体制を整えました。

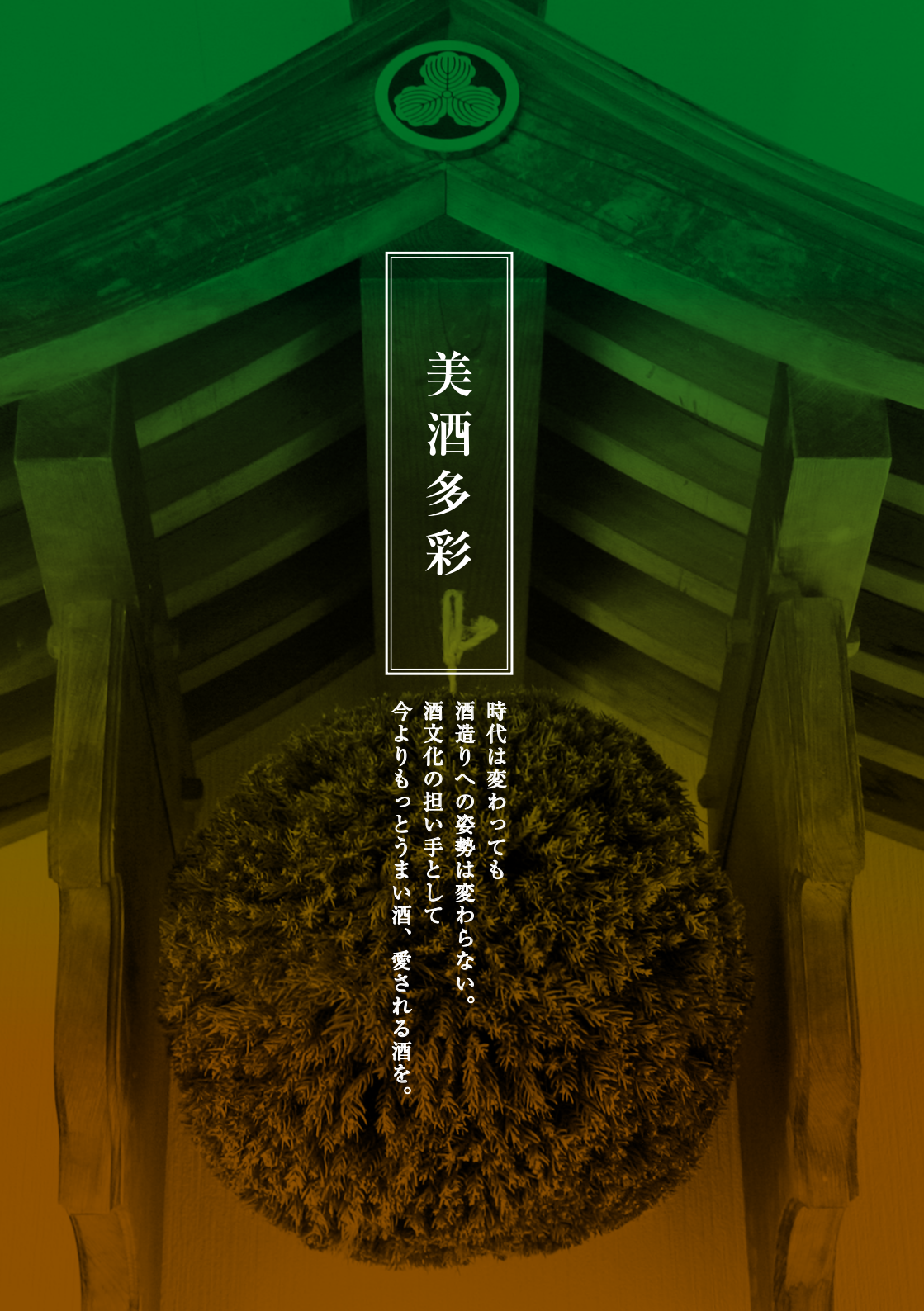
そんな柏露に大きな転機が訪れます。昭和六十年（一九八五）十二月、創業家の山崎家からセゾングループに経営が委ねられたのです。これを機に、西武百貨店、西友、西洋フード、吉野家などグループ企業と取引を開始。西武百貨店では「越乃四季」ブランドを展開し、吉野家ではオリジナル商品「吉野家」を発売、その品質の高さが評判となり、首都圏を中心に販売を拡大、西日本にも進出し、全国展開に発展しました。技術面でも全国新酒鑑評会にて平成二年より連続三年金賞を受賞するなど、その後も各品評会で好成績をおさめています。平成十年（一九九八）には一層近代的な設備を備えた新蔵を建設し、更なる品質と安全性の向上に努めました。セゾングループは平成十三年（二〇〇一）には事実上解散しておりますが、グループのお取引先との繋がりは切れることなく今現在でも大切な得意先となっております。平成二十一年（二〇〇九）には、単式蒸留焼酎製造免許を取得し、原料の大吟醸酒、吟醸酒、純米酒、普通酒の4種類の酒粕をそれぞれ商品化しました。平成二十五年



明治31年完成 旧蔵王醸造場 現北越製紙研究所（平成4年撮影）
（近藤 久 著者、編集「柏露酒造夜話」より）



旧蔵王蔵正面屋根 山崎 文字入り具し
（近藤 久 著者、編集「柏露酒造夜話」より）



美酒多彩

時代は変わっても
酒造りへの姿勢は変わらない。
酒文化の担い手として
今よりもっとうまい酒、愛される酒を。

(二〇一三)にはリキュール製造も開始しました。中でも、旨味と香りの二種類の柚子を使った「W 柚子」は大好評を得ています。

平成二十七年(二〇一五)に、濱田グループ入りし、更なる発展を目指しております。令和二年(二〇二〇)には、ISO9001を取得し地球環境、製品安全を最優先とし、顧客第一に徹し魅力ある製品サービスを提供するために努力しています。

長い歴史の中で、人間の持つ無限の可能性を信じて際限のない努力を続けてきたからこそ、多くの人々から愛され、大切に育まれた「柏露」の酒。いにしえの蔵人たちの精神と技は、今も大切に受け継がれています。

母なる 大地の実り

越後平野に位置する長岡は、
古くから長岡藩の城下町としてにぎわった町。
米どころ越後の各地で大切に育まれた美味しいお米は
この地に集まり、うまい酒となります。



蔵人たちの酒米

長岡は昔から越後の良質米の集積地で、伝統的に酒造りが盛んなところです。冬は酒造り、夏は米作り、そんな蔵人たちが育てた酒米「五百万石」「越淡麗」を磨き上げた「柏露」の酒。

「五百万石」は、「菊水」と「新200号」の交配によって新潟の気候風土に合うよう開発されました。新潟県の米の生産

量が500万石を突破したことが名前の由来になっています。麴が造りやすく醪で溶けすぎず、蒸米も弾力性があり、醸造適正の高い品種です。

「越淡麗」（新潟酒72号）は「山田錦」を母、「五百万石」を父とする酒造好適米です。タンパク質含有率が低く、精米特性に極めて優れています。生酒は「柔らかくふくらみがあり、淡麗できれいな五百万石や、やや甘みの強い、味わいがある山田錦の特徴を備えながら独自の味わいが特徴です。



天の恵み 大地を潤す命の水

日本有数の豪雪地帯、日本一の信濃川。

降り積もる雪が空気を洗い、地上を浄める。

雪融け水は大地を潤し、やがて大きな流れとなる。

清らかな水こそが酒造りの命なのです。





心と技 守り育て、 伝統となる

酒蔵の宝、蔵人たち。
古くより伝えられた技は、
やがて伝統となり、酒造りの心となる。
そこには、酒文化の担い手としての
誇りがあります。

伝統を守りながら 新しい日本酒の世界を拓く

ひら

酒造りは伝統的な職人技の世界。

しかし、近年は「食」の嗜好の多様化が進み、求められる味も様々。本格的な淡麗辛口を原点としながらも、新しい味わいを生み出すための研究開発に積極的に取り組んでいます。

長年の経験を持った杜氏と新しい感性を持った若い世代の社員たち。それぞれが力を合わせ、より美味しく、皆様に愛されるお酒の創造を目指しています。



日本酒ベースのリキュール「Amule」(柚子・桃・梅酒・シャルドネ)



瓶内二次発酵による発泡純米酒「HANABI」

時を越え、 未来を翔ける 柏露の心

か

今よりもっと、うまい酒、愛される酒を。酒造りに携わる者すべての、変わらぬ思い。

時代の変化を読み、研究を重ね、新たなうまい酒を創り出す。

たゆまぬ努力で、柏露の心を未来へと繋いで行きます。









年表

第8代孝元天皇―武内宿弥―田内左衛門成富(奈良県)―阿波民部丞成能(徳島県)
室町前期～戦国時代 三河 牧野氏、今川氏より牛久保城築城を許される

江戸時代

1565	牧野成定 徳川勢力傘下へ
1590	牧野氏 牛久保(愛知県) から上州(群馬県) へ
1616	堀直竈長岡城築城の際、慰労に酒を振舞った
1618	牧野家 長岡藩に入封、亀屋庄兵衛の名前の記録あり
1699	長岡での製造数量 1659石
1751	亀屋庄兵衛の名で宝暦年間に酒造を始める
1760	亀屋庄右衛門の名で文献あり、有力商人だった
1785	長岡での製造数量 2595石
1786	長岡での製造数量 1874石
1787	長岡での製造数量 1268石

明治

1816	越中屋又七(亀屋Ⅱ越中屋)の文献あり
1818	長岡の人口 1万5千人
1831	越中屋 隠し造り摘発を受ける
1867	明治政府樹立
1868	戊辰戦争始まる、越後へも波及
1869	招魂社祭始まる
1870	婦農婦商が推奨、贈られた米百俵で学校建立
1871	越中屋 250石製造でトップ
1876	牧野つね子 女性社長措置で醸造開始 柏葉屋 899石
1877	西南戦争
1878	5代山崎又七が新潟県下の経済発展のための「誠之社」メンバーとなり、第六十九銀行設立発起人の一人となる
1879	義士会発足
1882	山崎又七が長岡商会設立、有力株主となる 日本銀行設立、松方デフレ 山崎又七が柏屋買収

昭和	
1887	酒造業者の集会を長岡で開催、山崎又七取りまとめ役で奔走
1894	山崎又七が長岡工業創業時取締役となる
1898	長岡大火 蔵王蔵へ移転
1908	北陸鉄道が開業、長岡駅ができ、柏露は全国主要都市とつながる長岡を代表する酒になる その需要に対応するため山崎酒造場として規模拡大を行う 又七の長男 市治郎が柏露の営業に専念、高橋貞蔵が尽力生産高3千石 酒造の大部分が清酒になる うち2千石は四段仕込み法を全国に先駆けて行い好成績を上げる みりん「明星」製造開始、従来より高品質、低価格で日本の食文化を変えた このころ蔵王蔵は柏露蔵と呼ばれるようになる
	昭和の初めに当時の集まりである「柏陽会」を結成、又七の孫二三が顧問を務めた

戦後	
1943	柏陽会の活動は、「柏露」の名を高めただけではなく、県下の清酒業界に大きな発展をもたらした
1945	第2次世界大戦による統制令により廃業、蔵王工場を売却店舗と表町貯蔵蔵を戦災で焼失
1956	酒類統制解禁復活
1974	柏露酒造株式会社として酒造業を再開
1985	十日町に新工場を建設し本社移転、増産体制を整える
1990	セゾングループ傘下になる
1998	平成2年より3年連続金賞受賞全国新酒鑑評会
2001	新蔵建設
2009	セゾングループ解散
2013	単式蒸留焼酎製造免許取得、酒かすを商品化する
2015	リキユール製造開始、「W柚子」が大好評を得る
2016	濱田グループ傘下となる
2020	全国新酒鑑評会 平成28年・29年連続金賞受賞 ISO9001を取得し、地球環境、製品安全に配慮した製品提供を行う

あとがき

柏露酒造は明治維新以降、戦争で焼け野原になった城下を復興しようと努力している旧家臣を励ますために、造り酒屋を興した長岡藩主牧野家の酒蔵を、明治十五年に譲り受け同家の家紋「三つ柏」と清酒「柏露」を継承しています。

酒造業界でも珍しい大名蔵ということで、歴史家河井継之助記念館館長の稲川明雄先生のお力添えにより編集することが出来ましたこと、この場を借りて感謝申し上げます。

残念ではありますが、稲川明雄先生は令和元年十二月に他界され、この記念誌をお見せできなかったことが無念でなりません。

さて、この記念誌の発刊の前に、越後長岡藩主十七代当主牧野忠昌様からお借りした十一代当主牧野忠恭が自ら絵筆をとって描いた「甲子大

黒図」をデザインしたラベルで記念酒を造りました。「甲子」はものごとの始まりを表し「大黒」は繁栄をもたらすといわれており縁起ものです。

山崎家（商家）と牧野家（武家）が合体した柏露酒造は、時代を超え逞しく生き続ける遺伝子を受け継いでいます。今後の柏露酒造にご期待ください。

令和三年一月

心技伝翔 柏露誕生物語 編集委員

取締役社長 尾坂 茂

社長室参与 大杜氏 白原 光明



心技伝翔 柏露誕生物語

令和三年一月八日 初版第一刷発行

原案 稲川明雄

監修 柏露酒造株式会社

新潟県長岡市十日町字小島一九二七番地
電話〇二五八―二二―二二三四(代)
<https://www.hakuroshuzo.co.jp/>

発行 印刷 有会社社トヤマ写真製版所
新潟県長岡市袋町二―一〇八五番地
電話〇二五八―三二―三八六二

本書の記事・写真等を無断でコピー及び使用転載することを禁じます
ISBN 978-4-600-00454-5



